

地域医療連携室だより

地域医療支援病院 登録医療機関 196件

2011年3月



総合待合

地域医療連携について考える

肢体不自由児施設長 奥住 成晴

昨年（平成22年）12月11日に、創立40周年記念行事と併せて当センターの学術集談会が行われ、何人かの先輩方から「こども医療センターに望むもの」と題して講演がありました。この中で私の印象に残ったこととして、当センターが担ってきた包括医療の重要性が挙げられます。当センターでは多科にまたがる問題を持つお子さんに対して、内科系、外科系を問わず、関連科が素早く協力し合って診療に当たることを目標にしていますが、こうした連携は一般病院や大学病院などでもなかなか上手くできない場合も多いようです。また当センターは設立当初から、病院部門のほかに児童福祉施設を併設して運営されており、病院と施設が円滑に協力し合って療育にあたることを目標としてきたと思います。こうした診療科同士や福祉施設との連携があつてこそ、当センターが「センター」と呼ばれる所以と考えています。



さて、私が担当している肢体不自由児施設では、比較的長期にわたる整形外科疾患（骨関節・脊椎疾患）を持つお子さん方に入所していただいて療育を行ってきました。手術目的で入所となる疾患がほとんどで、とくに足部の矯正手術や、骨延長手術なども行っています。

ペルテス病という股関節疾患は大腿骨の骨頭が壊死を起こすものです。この疾患は、早期診断を行って免荷してあげないと骨頭が潰れて機能障害を残す可能性が高くなります。ペルテス病以外にも早期発見が重要な骨関節疾患が数多くあります。とくに、化膿性の関節炎、大腿骨頭すべり症などでは診断が遅れると決定的な機能障害を残します。このような“早期発見”には、第一線の整形外科、小児科の先生方、その他の医療関係者のご協力が是非とも必要であります。

“地域連携”について考えるにあたり、各種疾患の診断、とくに早期発見に関する啓蒙普及の努力をこれまで以上にすべきと考えていますので、よろしくご援助ご協力をお願い申し上げます。

食物アレルギーの新しい対応 食べて治す



アレルギー科 栗原 和幸

ほんの数年前まで、食物アレルギーの患者さんには食物除去と誤食時の対応しか指導できませんでした。我々は 2007 年に重症卵アレルギーの患者さんに短期間で卵を食べさせる治療に成功して以来、食べて治す治療（急速経口耐性誘導）に積極的に取り組んでいます。この方法は、重症食物アレルギーの患者さんに対して、入院して、問題となる食品を反応が起こらない量から増量しながら 1 日 5 回、経口摂取を続けるものです。卵のほか、ピーナッツ、牛乳、小麦のアレルギーでも実施して、ほぼ全例で成功しています。但し、退院後の日常生活の中で摂取してアレルギー症状が誘発された例もあり、まだ完璧な治療とは言えません。しかし、これまで全く治療法がないとされてきた食物アレルギーにおいて、画期的な成績であると言えます。新聞やテレビでも繰り返し報道されています。現在は、家庭でゆっくり実施する方法も大勢の患者さんで行っています。食物アレルギーは診断方法にも大きな問題があり、検査で陽性反応が出ていても除去をする必要が全くない人も少なくありません。本当にひどい反応を起こす人も、除去の必要性に疑問のある人も、専門医にご相談ください。



作業療法室



運動療法室

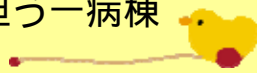


こどものリハビリテーション・発達支援

リハビリテーション科 上原 さおり

リハビリテーション科では、様々な疾患による運動障害や発達に問題がある子ども等の診療を行っています。入院では、他の診療科の入院治療の一環として必要とされるリハビリテーション（様々な疾患の急性期リハビリテーション、周産期ハイリスク児に対するNICUからのアプローチ、呼吸理学療法、廃用性障害に対するリハビリテーション、哺乳・摂食・嚥下機能障害へのアプローチなど）を行っています。外来では、脳・神経系疾患や筋疾患、染色体異常、その他の疾患に伴う発達の障害や原因がはっきりしない運動発達の問題がある子ども等に対して、発達状況や運動障害の評価を行い、必要に応じて理学療法・作業療法の導入や義肢・装具・車いす・座位保持装置などの作製をし、ご家族へのアドバイスや発達支援を行っています。また、ライフステージに応じた社会参加等を考慮し、病状等が安定したらできる限り居住地でのリハビリテーションや療育が受けられるように、県立総合療育相談センターや各地域の療育機関への紹介を行っています。子どもたちの持っている能力の発揮や QOL の向上を目指して、発達支援に取り組んでまいります。

三次小児救急医療を担う一病棟



ハイケア・救急病棟 1 黒田 美智子

「ハイケア・救急病棟 1」は、三次小児救急医療のお子さんを受け入れる病棟の一つです。三次小児救急医療で入院されるお子さんのほかに、手術後や内科系で呼吸・循環管理を必要とするお子さんが入室しています。ベッド数は16床と少ない病棟ですが、年齢や診療科は様々で緻密な観察や濃厚なケアを要するお子さんが多く入院しています。そのため、一般病棟より看護師の数は多く配置されています。

ほとんどのお子さんが、監視モニターを装着し、また常時人工呼吸器を装着しているお子さんが半数近く入院していますので、静かな療養環境とはいえません。急性期で処置に追われることが多くありますが、入院中に誕生日を迎えるお子さんの誕生会や季節の行事を行うなどお子さんやご家族にできるだけ楽しい入院生活が送れるよう関わっています。

状態が安定してくると元の病院に転院したり一般病棟に移動しますので、患者さんやご家族の関わりは短時間になることもしばしばあります。入院されるご家族が安心してお子さんを入院させることができるよう、患者さんのケアは勿論のことご家族への声かけや関わりに配慮しています。



池波文庫



こども医療センター図書室を利用してください

図書室 山口 文子

こども医療センターには職員用の医学図書室と外来患者用の外来図書室があります。職員用図書室の一部は「池波文庫」という名前をつけ、入院患者さんに絵本や読み物などを貸し出しています。外来図書室は、本館1階の周産期棟につながる一角にあります。小さなスペースですが、病気や障害のことなどの情報を提供していつでも使えます。

<職員用図書室> 当センター職員その他、登録医療機関の医療従事者、各図書館からの紹介状持参の医療関係者にもご利用いただけます。調べものなど、何かありましたらどうぞご遠慮なくお問い合わせください。入室の際は、院外の方はカウンター「入室者名簿」にご記名をお願いいたします。

利用時間：職員以外の方は平日 8:30～17:15（担当職員がいる時間内で利用可能です）

利用方法：図書室での資料閲覧は可能。院外の方への貸出サービスは行っていません。

文献検索：医学中央雑誌、Pub Med 等検索用データベースが図書室内で検索可能です。

当室所蔵以外の文献の取寄せはカウンターでお申し込みください（実費）

蔵書：購読雑誌 国内雑誌 55 誌 外国雑誌 101 誌（電子ジャーナル含む）

単行書 約 6300 冊 製本雑誌 約 27000 冊

図書室 内線 2 5 6 1 E-mail: tosyoko@kcmc.jp

神奈川県立こども医療センターの基本理念と基本方針

1 基本理念

こどもの健康の回復及び増進と福祉の向上のため、最善の医療を提供します。

2 わたしたちのちかい

あなたの「げんき」と「えがお」のためにみんなでちからをあわせませます。

3 基本方針

- (1) 患者さんの命と安全を第一に考えます。
- (2) 患者さんと家族とともに医療を行います。
- (3) 高度、先進的な医療を行います。
- (4) こどもの発育、発達を考えた療養環境、教育環境を整えます。
- (5) 周産期・小児医療と保健・福祉に携わる人材育成に努めます。
- (6) 地域の関係機関と連携し、周産期・小児医療の充実、向上に貢献します。
- (7) 透明度の高い病院運営と情報公開に努めます。

神奈川県立こども医療センター・研修のご案内

第10回 母乳育児学習会

日時：平成23年5月27日(土) 18:30～

場所：当センター 本館2階講堂

テーマ：「母乳分泌不全へのアプローチ」

お問合せ：地域医療連携室

第82回 学術集談会

日時：平成23年6月11日(土) 14:00～

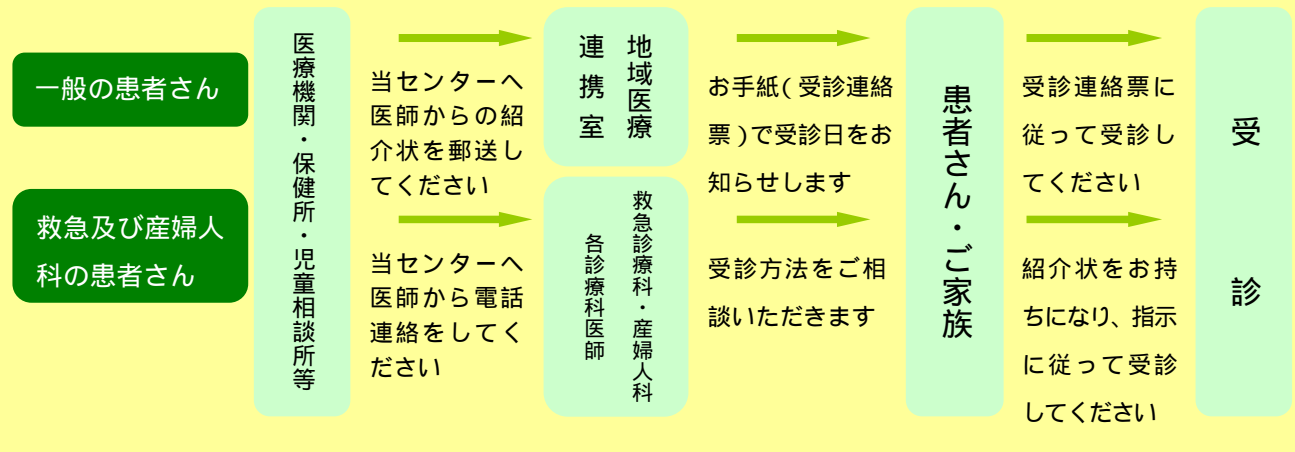
場所：かながわ県民センター

テーマ：「先進医療とセーフティマネジメント」

お問合せ：総務課

【紹介予約受診システム】

当センターは、医療機関や保健所等からご紹介いただいた患者さんが、初診の予約をお取りになり受診していただく「紹介予約制」を取らせていただいております。予約の方法・手続きにつきましては下記をご覧ください。



紹介状用紙(料金受取人払)の送付をご希望の場合は、地域医療連携室までご連絡ください

編集・発行

神奈川県立こども医療センター 地域医療連携室
〒232-8555 横浜市南区六ツ川2-138-4 TEL 045(711)2351 FAX 045(710)1933
<http://kanagawa-pho.jp/osirase/byouin/kodomo/>

